

稀勢の里休場 右ひざ痛める

一人横綱で戦い、初日から4連敗していた稀勢の里が5日目の15日、休場した。初日の貴景勝戦で右ひざを捻挫し、全治1カ月と診断された。横綱在位11場所目で休場は9度目。7月の名古屋場所に続き、全横綱が不在となった。師匠の田子ノ浦親方(元幕内隆)は進退問題の再燃が避けられない来場所へ向け、「本人は『このままでは終われない』と。覚悟して臨むと思います」。八角理事長(元横綱北勝海)は「体を作り直して頑張るしかない。もう、(右ひざ)が痛いと言っているなら、(休場)はない」と話した。

山内昌之・横綱審議委員会委員(東大名誉教授)の話
「横綱の責任を果たそうと4日目まで出場した自覚は評価できるが、結果は誠に残念。進退は最高位が自ら決めるもので、本人に期するところがあると思う。私としては頑張ってほしい」



15日朝、休場を表明する稀勢の里。福岡県大野城市

休場を表明した稀勢の里。来場所に出場するとも、そこで進退をかけるとも明言しなかった。覚悟を問われると「考えていきます」。新たにけがした右ひざが回復するが見通せないのだから、歯切れが悪い。周囲が、横綱の置かれた状況に抱く危機感とのギャップを感じざるを得ない。

初日にけがをしたなら、3連敗した3日目の夜に師匠と話し合った際に、休場を判断する手もあった。4日目の土俵を務めたのは横綱の判断だ。初日から4連敗という汚名は、当然背負わなければならない。

横綱審議委員会の北村正任委員長(毎日新聞社名誉顧問)は「横綱の第一の条件で

進退 来場所ハードル高く

ある強さが満たされない状態が長期にわたっており、これを取り戻す気力と体力を持続できるか心配している」とコメントした。稀勢の里に優しかった横審が、ついに復活に懐疑的な見方を示した。8場所連続休場の根拠は主に左胸のけが。今回、「新たなけが」をも許容しては、結果を出せない横綱が際限なく居座り続けてしまう。

優勝争いを義務付けられ、番付が落ちない横綱は進退の決断を自らが行う。10勝で引退の危機を乗り切った今年の秋場所よりも、来場所は高いハードルを課して進退をかけるべきだ。復活を願うファンは多い。だが、今の姿では綱の権威は守れない。

(鈴木健輔)